

海 (かいし) 市 No.3

●詩

02 前田 勉 金曜日の朝

06 横山 仁 いる

●エッセイ

08 佐藤ただし 水田とツバメ

10 片津 森 山を引き返した日

14 横山 仁 雑記 (3)

金曜日の朝

前田 勉

今日が

何気ない素振りで刻まれ始めると

それを確かめるように

たまたみ込まれていた昨夜の発酵した意念が

追隨してゆく

まるで陽を浴びた塵のように

無数の光の粒となつて舞い

カーテンの向こう側で

きらびやかに解けはじめ

言いたいのは

人

ひと

人々ではなく

ひと

人とひととのつながりの前の

人

ひとつの

ひと

であるべき

個体

だ

てんでに逃げろ！

語り継がれることもなく

形骸化してしまつた体躯は

捨て置かれた記憶に似て

時間に沈潜し腐敗し消えるのか

意識されることもなく

大宇宙の端っこでぐるぐる自転しながら

ああ、俺は

と

言葉にできないまま

自戒することさえできずに

そこで終わるのか

人らしく近づくことはできるのか

ひとらしく

だ

何にこだわり何に萎縮するのか

ひとにか

人びとにか

自分にか

きらびやかに舞う光の粒が

カーテンのプリーツに紛れ込み

そこだけが帯状の影になってゆく
憑かれたように

その影と光の粒を見ながら

始まった

朝

十四時四十六分までには

まだ時間がある

いる

横山 仁

いわなかったことば
いえなかったことば
きけなかったことば
きこえなかったことば
きかなかったことば
こにいるよ*

みなかったことば
みえなかったことば
さがせなかったことば
さがさなかったことば

ここにいるよ

かんじなかったことば

かんじられなかったことば

ねむらなかつたことば

ねむれなかつたことば

ここにいるよ

ここにいるよ

のまえのことば

の

ちんもく

ここにいるよ

*前田勉「夢想」(「海市」2号)より

水田とツバメ

佐藤 ただし

今年（二〇一六年）の一月末から二月の初めにかけて、ベトナムのハノイとカンボジアを旅行してきた。二月いっぱい会社を退職するため、一区切りつけるための旅行である。

今回の旅行で印象深かったのは、ベトナムのハノイからハロン湾に向かう途中で見られた水田風景と、カンボジアのアンコールワットの遺跡で見かけたツバメだった。

ベトナムのハノイからハロン湾にはマイクロバスで行ったが、車窓から見える景色は、日本の水田風景に似て、田んぼが畦畔で四角く区切られ、土壌も日本でもよく見受けられる色をしていた。ガイドさんの話によると、田植えは全て手植えにより行われ、旧正月が終



ハノイからハロン湾へ向かう車窓から見える水田風景（ベトナム）

わる頃（二月中旬）から始まるという。

広々とした水田では、所々で水牛に鋤を引かせ、田起こしをしていた。牛が放し飼いされ、水路のあちこちにアヒルが飼われていた。

畜力と機械の違いはあっても、イネを育て、米を作るということに関しては、ベトナムも日本も変わらないなという思いを持った。と同時に、海を隔て五千キロも離れたベトナムと日本で、似たような稲作が続いていることが、俄かには信じられない思いだった。改めてイネが日本単独のものではなく、アジアを中心に広く作付されている作物であることを実感した。

ベトナムのハロン湾は海の桂林と呼ばれ、浸食された奇岩が湾の中にポコンポコンと出ている観光地で、



ツバメが飛び交っていたアンコールワットの遺跡（カンボジア）

木船に乗り遊覧を楽しんだ。

今回の旅行のもう一つの目的地はアンコールワットの遺跡を見ることだった。「アンコール」は街や都市という意味で、「ワット」は寺院という意味だと現地ガイドは教えてくれた。アンコール遺跡について、パンフレットには九世紀から一五世紀にかけてインドシナ一体を制圧したクメール王朝の主都跡とある。その一つであるアンコールワットは、敷地の周囲が東西一五〇〇メートル、南北一三〇〇メートル、幅二〇〇メートルの堀で囲まれている。高さ六五メートルの尖

塔や、ヒンドウ教の神話が、石の壁にびっしりと描かれた回廊を現地ガイドの説明を聞きながら歩いた。しばらく歩いていると、見慣れた小鳥が飛び回っていることに気が付いた。ツバメだった。日本

でよく見かけるツバメとは種が違うのかもしれないが、ツバメの仲間には違いない。自由に飛び回る姿を見て、冬の間、南の暖かいところに越冬していると漠然と想像していたことを実際に見ることができ、何か旧知の仲間に異国で会ったような気持ちになった。

ツバメは、日本では田んぼの代掻きをする頃に田んぼの泥を運んで巣作りを始め、田んぼの害虫や蚊などをエサとするため、益虫として、古来人間に親しまれてきたという。家の中や作業小屋の中に入って巣を構えるのも、人がツバメを大切にしてきた証しだといわれる。そのツバメの渡りのルートにベトナムやカンボジアなど東南アジアの水田が広がり、営々と人々の生活が営まれているのを見て、アジアとの結びつきが少し深まったように思えた。

インターネットで検索したウイキペディアによると、日本で繁殖するツバメの主な繁殖地は、台湾、フィリピン、ボルネオ島北部、マレー半島、ジャワ島などである。これらの国からもうすぐツバメたちがやってくる。

山を引き返した日

片津 森

ある年の五月、山梨(甲州)、埼玉(武州)、長野(信州)三県にまたがる甲武信ヶ岳(こぶしがたけ)(標高二、四八〇メートル)に向かった。登山口毛木平(もうきだいら)の広い駐車場は一面舗装されていて一台ごとの区画線が引かれている。一角にはトイレと四阿も整備されて気持ちがいい。ここが標高一、四三三メートルだから甲武信ヶ岳までは標高差千メートル余り。東西二本のコースがあつて周回できるよつになつてゐるので、今日は楽そうな西側から五時間半で登り、山小屋で一泊後、翌日は東側のコースを下る予定を立てた。状況次第では登つた道をまた下つてきてもいい。

秋田を発つ前に甲武信小屋のホームページで、山頂付近に二〇〇センチの積雪があることは把握して

いた。前泊の予約をした清里の宿から、今年は例年より積雪が多く雪解けが進んでいないので、六本爪のアイゼンを持参するよう勧められていた。

身支度を終え、九時四十分に出発。晴天下、カラマツ林の中の路を歩いた。ところどころで倒木が目につく。強風にやられたのだろうか。目を上げれば、あたり一帯の木々にもう若葉がしっかりと色づいてゐる。秋田の山に緑が広がるのはこれからだというのに。Z字状の緩やかな坂を過ぎると、アセビやシャクナゲがあつた。もう一と月もすればシャクナゲが開花するのだろう。

甲武信ヶ岳は千曲川の源流部のある山だ。新潟に入ると信濃川と名を変え、日本海に流れを注ぐまでの総延長は三六七キロメートル。その源を見たいというのが、このコースを選んだ理由だった。川は雪解けの真新しい水を跳ね上げながら流れ、木の間越しに見え隠れしながら、遠く離れたり山路の傍に寄つてきたりする。

途中、ナメ滝というところに出た。四、五畳もの広さの巨岩の顔を滑るように水が流れている。川辺の

岩に腰をかけてスケッチブックを開いた。手を動かすこと二十分。しかし、やはりどうもなあ。清流をそれらしく描きたいが、どうも線が直線的になったり、紙面の白を生かせなかつたりして、流れの様子をうまく描けない。結局、三十分で切り上げて再びザックを背負う。辺りには残雪が広がっている。

秋田の山で踏む残雪と、この山の残雪も雪には違いないけれど、この雪解け水を集めて国内最長の流路をもつ川となつて日本海へ行くんだよなあ、と何やら感慨深い。

アイゼンを着けたり、岩の路が続けば外したりしているうちに、他の登山者とすれ違つたり越されたりする。そのたびに挨拶を交わしたりして行くのだが、しかし、そのうち、自分の中に異変が生まれてきていることに気づく。背の下、腰のあたりに感じるチリチリした微かな痛みはなんだろう。

「千曲川源流まで0・9キロ」という表示があつた。間もなく下山してきた人は、源流部は雪に覆われていてみる事ができないと言ひ残していった。日当たりがよく、そだけ雪の消えた一帯のなかから適当な岩

を見つけて腰を下ろした。源流部を見ることができなくとも、山頂を踏んだ後は、山小屋で富士山や八ヶ岳秩父の連山を眺めながらビールを飲もう。明朝は来光を仰げるかもしれない。あと一時間登ればいい。その自信はある。

歩きながら「チリチリ」の原因について考えている。昨日の長時間の高速道路の運転でいつの間にか緊張して、背筋がいつもより立ち気味になつていた気がする。そして、さっきはナメ滝を過ぎてから、雪が覆つた窪みの上を不用意な一歩で踏み抜いたことが脳裏にある。上半身とザックの重みが一気に腰にささつたか。雪の下山路、踏み込んだ足が空振りし、腰が伸びきつた時に着地して腰を痛めたことは数年前に経験している。翌日未明痛みで目が覚めた。寝返りしようと背中筋肉をピクリとでも動かそうものなら電流のように激痛が走つた。数時間後、ようやくの思いで整形外科に行つて注射を打たれ、痛みがなくなるまで三、四日要した。問題は明日の下山の際に、腰のチリチリがもっとはつきりした痛みになつていないかだ。登り以上に下山では腰にかかる重さはこたえるだろう。途中、あ

の未明のように身動きが取れなくなったらどうなる。携帯電話の電波の届かない山中のこと、他の登山者に救助の連絡を頼むしかない。しかし、現実味のあるリスクを無視したために遭難し、人を煩わせて救助を受けるのは恥ずかしい話だ。山は逃げない、また来れるよ。午後一時半、そんな結論を出して踵を返したのだった。

約四時間の登山だった。これでよかったのだと言い聞かせながら、まだ日の高い路を下った。途中二、三度、雪玉を作って川に投げこんだ。これから延々三六七キロを旅する流れの一滴となつて日本海に入れよな、多分そんなことを思つたような気がする。そして、午後三時二十分登山口駐車場に到着した。こうして甲武信ヶ岳登山は、山頂はおろか千曲川源流を見ることもなくあっけなく終わったのだった。

*

ついでに、登山の前後に印象に残つたことを書いてみる。

登山前日、投宿した先は山梨県清里（北杜市）の別

荘地にあるロッジだった。その数か月前に本屋で中村好至恵という人の画文集を買った。名高い山や初めて聞く山の水彩スケッチが収められている。画家の名前でネット検索して出てきたのがこのロッジで、施設内にこの画家のミニギャラリーがあるという。甲武信ヶ岳登山で前泊するならここだと決めた。

夕方チエック・インすると、食堂、廊下、手洗い場、客室内に画文集と同じタツチの絵が、多分二十点近くは架けられていて、手作り感のある画廊だった。澄明な色彩、ときに勢いのある筆運び、現実の山の姿や細かな起伏などに囚われない心象画といった感じの絵が、とてもよかった。ただ、帰宅後に思い起こしてみても、他の客室に架かっている絵もあつたのに、それを見せてもらふことまで気が回らなかつたのが心残りではあつた。

夕食時にビールを注いでくれたご主人が「秋田の人たまに来ますよ」という。ご主人は登山の案内書の執筆で、山梨や秩父の山のルート解説などを書き、実際のガイドもしている人だった。驚いたことに、私が甲武信ヶ岳に向かうにあたって参考にした案内書もこ

のご主人が書いていた。そして、同じ出版社の秋田県の山の案内書を書いた人とは執筆者仲間で、先日泊まりに来たといい、指差した壁の上には日本山岳会秋田支部のペンントがかかっていた。

私は山岳会とは縁がなく、秋田の執筆者と一面識もないので、案内書を書くベテランたちのつながりのなかに迷い込んだ気分だったが、温かい気持ちにもなった。翌朝、ご主人は甲武信小屋に私が今夜泊まりに向かうことを連絡したといってくれた。ありがたかった。しかし結果は途中で引き返す羽目になり、下山後、電波の届く川上村の郵便局まで来て、山小屋にキャンセルを伝えたのだった。

*

山を下りてからは登山口から車を走らせ、朝来た舗装路をゆっくり戻った。そこは長野県川上村。辺りは広大で整然とした畑地だった。平らに均された土の一帯の隣りに、やや間隔の狭い畝が何十本も果てなくらい続いている。その先で作業している家族らしいかたまりが動いていた。今年の種まきがこれから始まる

のだろう。土地のゆるやかな起伏が気持ちよく、今度は白や黒のマルチビニルが張られた無数の畝が同じ方向を向いていて、左右に展開する幾何学模様が美しかった。農作業の効率化が到達する図らずも必然的な美……ってか。

帰宅後、川上村のホームページをみて分かったが、この村は高原野菜の産地で、特にレタスは国内一の生産量を誇るのだという。私が見たのはレタスや白菜の農場だったようだ。川上村は南北に細長い長野県の東端中央部にあつて、これも南北に長い秋田県に当てはめてみれば美郷町と同じようなところに位置する。一年の平均気温は八・五度、最低気温はマイナス一八・九度で秋田県鹿角市よりも寒い。村の標高が一、一〇〇mから一、五〇〇m（登山口とほぼ同じ）だから、この人たちはいつてみれば秋田駒ヶ岳八合目付近の高地で日々暮らし生産活動をしていることになる。

やがて白銀を頂いた八ヶ岳が正面に現れ、ついにそれも後ろに遠ざかっていくうちに川上村を抜け、その日の宿を求めて佐久甲州街道を北に向かった。

雑記 (3)

横山 仁

(一般社団法人国際食協会のホームページより)

《2014年4月、英国に本部を置く国際的な医療評価機関『コクラン計画』から、インフルエンザ治療薬・タミフルに関する調査報告が発表され、世界中に衝撃が走りました。

タミフルはインフルエンザにはほとんど効かないうえ、高い確率で副作用が出るという結果が出たからです。

この調査報告の発表が行われたあと、コクラン計画は提携関係にある英国医師会報編集局と共同で各国の政府にタミフルの使用を再検討するよう声明を出しています。(中略)

その結果、タミフルの売り上げの約8割は日本市場

となりました！

もはやタミフルにとっては、日本の市場なしでは立ち行かない状況になっています。》

もっとも、「タミフルの効果に懐疑的」なアメリカで、「CDC (米国疾病管理予防センター) が、タミフルの使用を推奨しているのは、入院が必要な重症の患者さん 65歳以上の高齢者 5歳未満の小児 気管支喘息、糖尿病などで免疫の落ちている人に限っています」とあるので、「海市」の読者 (65歳以上が多い) は安心されたい。

(アラキラボのホームページより)

《★日露戦争の戦費は、6年分の国家予算を超えた。

例えば日本軍の戦死者数を見ると、日清戦争が1万4千人であったのが、日露戦争では一挙に9万人に増えた。ロシアの戦死者まで入れると、過去に類例がない激戦であった。

また戦費の面で見ると、日清戦争が10ヶ月で2億3千万円であったのが、日露戦争では一挙に18億3

千万円に増えている。「昭和財政史」、第4巻、臨時軍事費

この日露戦争の軍事費は、当時の日本の一般会計の歳出が2.5—3.0億円程度であったことを考えると6年分以上の財政支出になり、当時の日本の経済力が負担できる費用規模を大きく超えていた。

当時の日本の産業は、生糸・繊維、雑貨などの軽工業が中心であり、鉄鋼・造船・機械などの重工業は未だ発達していき、資本主義もまだ帝国主義の段階にはほど遠い状態にあった。そのため戦争を行うには、まず外国から軍需物資を購入する必要があるのに、開戦当時の日銀の外貨保有量はわずか5千万円しかない。日清戦争で清国から賠償金として受領した3千8百万ポンド(約4億円)の外貨はとっくになくなっていった。新しく戦争を始めるためには、早急に年内に1億円を外国から借りる必要があった。

つまり18億円もかかる戦費にたいして、開戦時にわずか5千万円しかないという信じられない状態にあった。もし借金ができなければ開戦と同時に降服す

るしかなかったであろう。この外国からの借金を工面する役割を担ったのが日銀副総裁の高橋是清である。》

ようするに、戦争にはお金がかかるということ。そして、だが、何のためにはじめるのか。儲けるのはだれ? 犠牲になるのはだれ?

太平洋戦争で、軍人軍属の戦没者230万人のうち、半分は餓死だったという。

(「リュウマの独り言」より)

《2/11 今日のニュース 『北朝鮮が打ち上げ時のビデオ公開』と伝えるNHKの「国内向け」、「海外向け」ニュースにこれほど違いがある。

NHKが今日伝えた「北朝鮮による衛星ロケット打ち上げ」の模様のビデオに関するニュースを『海外向け』と『国内向け』を2つ並べてみてみよう。国内向けでは、なんとこの短いニュースの中に『ミサイル』という言葉が8回も使われている。画面を見れば、それ以上に『ミサイル』が刷り込まれることだろう。国際向けにはなんと1回きり。他は「ロケット」になっ

ている。多くの国民が「今の異常さ」に気が付かない最大の原因が「マスコミ」にあることだけは確かだろう。」

いまさらだけど。

《2/11 今日のYoutube 皆で見たい、『戦争のつくりかた』という絵本は知っていますか?という動画

Midori Fujisawa さんが紹介している 「What

Happens Before War?-(戦争の前に何が起きるか)」

というアニメーションは秀逸である。お子さんと一緒に見る事ができる。

kumiko sekioka さんの言われるように、もう「日本はその真ただ中」なのだが、そういう意識があるのとないのとでは、これから行く道は全く違ってくるはずだ。女性週刊誌の奮闘もさることながら、こういう活動をやってくださる方々に敬意を抱く。7分ほどの長さです。》

面白かったので、紹介しておく。

あとがき

◆ベトナム料理にクメール料理、アンコールビールに赤ワイン。旅行中に欲を出して飲食しすぎたせいか、帰ってから腹の調子がイマイチだ。あれほど好きだった日本酒も飲みたいと思わなくなり、パチが当たったのだろうか。(T)

◆詩は「週刊アキタ」に出したものの(3月掲載予定)に、少し手を加えた。(J)

◆某日の夜、カーテンの裾から射す青白さに気づいて窓辺に立つと、外は不思議な程に明るい幻想的な世界であった。子供の頃に見た雪明りの美しさが甦った。自然とは凄いものだ。春が近い。(B)

◆山の雪面に動物の足跡があった。瞬時に兎の像が脳裏に出来上がった。白く柔らかな生き物を抱いたのは60年程も前のこと。今、私の中にある兎はその時のものだろうか。いつの間にかTVが塗り替えてしまったものだろうか。(K)

「海市」 第3号

2016年3月11日発行

発行 書肆えん

秋田市新屋松美町5-6 横山方